

指輪の普及とその要因の探究

——明治期から大正初期を中心に——

鈴木 はる美

目次

はじめに

第1章 日本の指輪着用の過程

第1節 日本画・洋画・ポスターに描かれる指輪

1. 図像から導かれる指輪の変遷
2. 絵画からポスターへ

第2節 小説・広告における指輪

1. 記事における指輪の登場
2. 小説における指輪の登場

第3節 海外からの影響により変化する指輪

1. 海外の装身具
2. 指輪装着習慣の定着

第4節 指輪の種類の変化

1. 明治期の広告に見る指輪の変化
2. 享受者の変化

第2章 指輪の普及の社会的要因

第1節 金工作家の活躍

第2節 専門店や百貨店の台頭

1. 広告媒体にみる専門店と指輪のデザインの発展
2. 百貨店

第3章 指輪の普及の心理的要因

第1節 差異化願望と同一化願望

1. ファッションの心理
2. 女性にとっての「物」

第2節 指輪装着者の心理

1. 流行が煽る虚栄心
2. 流行の指輪は誰のものであったのか
 - (1) 日常的に楽しむ指輪「いま姿シリーズ」
 - (2) 人間関係を表す指輪

第4章 仕掛けられている流行

第1節 マス・メディア広告に見る普及推進

第2節 質と価格の多様化

おわりに

はじめに

日本における装身具の歴史は、世界の中でも特異である。縄文時代から古墳時代までは、素材の限定はあるものの、他国の装身具とほとんど変わらないものがあった。腕輪、耳飾り、ペンダント、アンクレット、そして数少ないが指輪などが出土する。

ところが奈良時代になると、装身具は忽然と姿を消し、以後、江戸時代末期までの約1300年間に渡り、首飾り、指輪、耳飾り、ブローチなどは存在しない。わずかに頭髪の装身具と宗教儀式用のみが存在する。これほどまでに装身具を使わなかった民族は世界では日本以外に無く、その理由は謎である。再び着用されるようになったのは、幕末の大政奉還とともに西欧化が始まり、和服から洋服へと着替えた明治期からである(1)。

この頃からわずか百年後の1970年代には、日本は世界で2番目の宝飾品消費国になり、女性一人当たりの消費額では、世界一となった。現在、成人女性の指輪保有数は、平均13.3個である(2)。日本人の装身具では最も指輪が多く、西欧諸国では首飾り、腕輪、耳飾りなどが多い。日本では何故指輪だけが好まれるのかに疑問を持ち、指輪の普及時期とその要因を探究する。

これまでの先行研究は、宝石学や金工・装身具史の観点からであり、視点が作り手や売り手側からのものである。享受者の指輪に対する心情に触れたものは文献として報告されていない。草野千秋は「指輪の流行」において、明治期の指輪のデザインの変化は着用者の要求によると論じる。しかし、指輪の普及の要因と享受者の心情を論じるには至らない(3)。露木宏は、明治期には和装に着用する指輪が普及したと述べる(4)。しかし、着用者や当時の流行についての論究はされていない。浜本隆志は、明治期の指輪の発展は海外の影響によると述べる。海外の風習を取り入れた結婚指輪の普及があった点を記載するが、具体的な資料提示はない(5)。3者ともに、「明治期には西洋文化の影響を受けて日本の指輪は普及した」とする点は共通である。しかし着用者の指輪に関する感情や社会背景などを考察する文献は存在しない。

本稿では、装身具が急速に普及した明治期を中心に、指輪をめぐる歴史や社会的状況を確認した上で、当時の着用者の感情に触れ、指輪の発展の要因を明らかにする。

明治期に指輪が発展した要因は、明治政府の施策により指輪を製作した金工作家や工房の活躍がある。また、専門業者や百貨店が海外の指輪着用慣習を取り入れ、日本全国に宣伝し、指輪の流行を起こした。そのような社会を背景にして、珍しく美しいものに憧れ享受した女の心情があったと考える。本研究では、先行研究にはない享受者の物欲を中心に論じる。

研究対象の場所は、当時の文化の中心である東京とする。時期は、明治初期から大正前期に焦点を合わせた。

第1章は、日本の指輪着用の過程を、絵画・ポスターにおける画像資料と、小説・文献・広告などの文字資料に分けて調査する。第2章では、明治期に指輪が急速に受容された社会的状況を探る。金工作家・工房および専門店や百貨店などが台頭した要因を明

らかにするものである。第3章では、時代背景を同じくする小説の文章に於ける女性の心理描写や、広告が意図した購買心理を考察し、指輪の普及との関係性を明らかにする。

調査は文献を中心に行い、当時の新聞、雑誌、広告その他の資料から素材や細工、デザインの変化を調査し、また、絵画資料や同時代の小説により人々の指輪に対する心情を探った。

第1章 日本の指輪着用過程

日本において指輪がどのように現れ、また指輪の享受者がどのように変化していったかを調べる。

第1節 絵画・ポスターに描かれる指輪装着場面

指輪装着を描く現存の絵画から指輪装着の場面を選び、指輪の素材やデザイン、また装着者がどのように指輪を嵌めているかがわかる。

1. 図像から導かれる指輪の変遷

はじめに錦絵を見ていく。明治10年代の月岡芳年の「見立て多以盡」には、幅広の指輪を嵌めた芸者が描かれる(図1)。20年代の豊原国周の「見立て春夜二十四時」の指輪装着図には、「午前五時」「午前九時」「午後一時」「午後七時」がある。「午後七時」(図2)には、金属の指輪を両手に嵌めた芸者が描かれる(6)。30年代の揚州周延「真美人シリーズ」の指輪装着図には「真美人一」「真美人八」「真美人十四」「真美人二十一」「真美人三十一」がある。町娘、女学生、御新造などが指輪を装着して描かれる。特に代表作と云われる「真美人 十四」(図3)では、和洋折衷服姿に洋書を抱えた手に、丸い石付の指輪を嵌めた女学生が描かれる(7)。明治40年前後の山本松谷「いま姿シリーズ」には、指輪装着図が27点ある。少女から年配までのバラエティに富んだ女性達が様々な指に指輪を嵌めている。女性達は、指輪やリボンなどの洋風文化を取り入れ、着物はゆったりと着付けをして襟元に華やかな半襟をのぞかせるなど、当時の風俗が細密に現れている(図4)。いずれも、絵画に描かれる指輪は小振りのものである。

指輪を嵌める指は、左手の薬指がもっとも多い。その理由は、結婚指輪の普及により、左手に指輪を嵌める習慣が既にあったものと推察され、西洋に憧れる当時の女性達の心情が見て取れる。(第1章 第4節で後述)

ところで、当時の著名な日本画家達が考案した指輪は、「天賞堂榮業一覽」に残されている。そこには瀧和亭による考案の指輪もある。瀧和亭の弟子、山本松谷が天賞堂の指輪の考案をするのも自然な成り行きであったのだろう(図5・15)。

2. 絵画からポスターへ

絵画では、岡田三郎助の「ダイヤモンドの女」(図6)、橋口五葉の「此美人」、鏑木

清方の「孤児院」「嫁ぐ人」などに指輪着用場面がある。明治 41 年、岡田三郎助の「ダイヤモンドの女」は、『時事新報』新春号の付録となり、指輪をつけた美人画は大変な評判であった。

ポスターでは、明治 44 年の橋口五葉の《此美人》(図 7) がある。懸賞募集広告に応募して 1 等を獲得したことで知られる。美女が手にする原典不明の版本には「衣がえ」の文字、三越の広報に併せた演出がされている。リボン飾りを着けた美女は、当時流行の二百三高地を結び、右手薬指には珠付の指輪を嵌める。この原画は石版摺りの豪華な絵看板に仕上げられ、三越の店内はもとより、駅構内、床屋、風呂屋、旅館、料理屋等に飾られた (8)。

指輪の広告は次の雑誌に見られる。月刊総合雑誌『国民之友』(明治 20 年創刊、明治 31 年廃刊)、月刊風俗雑誌『風俗画報』(明治 22 年創刊、大正 5 年廃刊)、日刊新聞『時事新報』(明治 15 年創刊、昭和 11 年廃刊)、月刊女学生雑誌『女学世界』(明治 34 年創刊、大正 14 年廃刊)、演劇雑誌『演芸画報』(明治 40 年創刊、昭和 18 年廃刊)、月刊誌『婦人画報』(明治 38 年創刊、現在まで続く) などである (9)。明治 20 年代には絵入り広告が雑誌に掲載され、30 年代に発行されたカタログによって指輪は通信販売として全国に普及する。これらの図像には、指輪の素材と指輪装着者の変化が現れている。

明治初期の図像では、芸者が平打ちの金属指輪を嵌めている。その後、女学生や娘、婦人等がさまざまな石付きの指輪を嵌めている図が現れる。後期には、さらに多様な年齢や職業の女性が指輪を嵌め、素材は金・銀・白金と変わっていく。また、ダイヤモンドなどの輸入石や国内産の真珠の指輪などを、多数の指に装着する場面も描かれる。洋装だけでなく、着物や指輪までが当時の流行となっていたことが伺える。人々は憧れの眼差しで図像や広告を目にして、享受者は次第に上流から中流・下流へと広がり変化していった。

上記から、素材や形の変遷が明らかになる。明治 10 年代には、指輪の素材は日本産出の瑪瑙や銀・金などであった。20 年代には真珠・ダイヤモンド・ルビー等の石付指輪になり、その素材は白金製が増えた。30 年代に入ると、海外からの輸入品に注目が集まるようになり、同時にデザインの模倣も始まった。

第 2 節 小説・広告における指輪

文献として、明治 11 年刊『明治事物起源』、32 年刊『東京風俗志』を用い、当時の様相を調べる。

1. 記事における指輪の登場

『明治事物起源』の「指輪の始まり」では次のような記載があり、素材は金・銀が多かった (10)。

「[文久三年版彦蔵漂流記中に、米国人の風俗を記し、男の懐中より指環を出して女の無名指にさす]云々とあり、明治6年3月『雑誌』81号に、府下当時見聞の儘として挙げたる風俗中に、[金銀の指環を掛ける者多し]とあり。7年10月[繁盛記]蕃物舗の條に、[頭蒙ニ凸帽一、指貫ニ金環一……講ニ金環一少年、買ニ香水一懶儻]

同「馬鹿の番付」には、下記のように記載されている。

[洋銀の指環をはめてうれしがってをる人]を挙げおけり。明治10年頃までは、青金若しくは銀金めつきに、家の紋など彫刻したるを、矢取女や麦湯の姐さんが穿ち居たる止り、(略)第一回内国勸業博覧會ありしより、粧飾界も西洋崇拜の度を高め、西洋風の廉物の模造となりせ寶石入の指輪盛んに行はれ、明治20年頃まで続きしが、今31年ころとなりては、紳士と呼ばれ貴女と唱へらるゝ人の指には、金光燦然たるこの物を見ざるはまれなるに至れり。

この文面からは、明治10年頃の接客婦達は、銀や金メッキの指輪や家紋入り指輪を嵌め、模造品や偽宝石を嵌める現象が続いたことがわかる。このことについては、第3章で再び引用する。

『東京風俗志』には、次のように結婚の儀式が記載されている(11)。

基督教徒の結婚の如き爬、その式簡潔にして、会堂に於いて行ひ、婿は右に、姫は左に立ち、牧師その間にありて、まづ夫婦たるの本旨を説き聴かせ、互ひに手を執らし偕老の誓をなさしめ、婿の指環を姫に授け、神にその靈護を祈りなどす。

2. 小説における指輪の登場

小説からは指輪に対する一般人の感情が汲み取れる。

明治24年の清水紫琴『こわれ指環』では、「朝夕これを眺めまして決意を新たにしたり」と自らが壊した指輪を嵌め続ける場面で、女の自立と尊厳を描いている。

明治25年の樋口一葉の文的処女作『闇桜』では、指輪が、主人公の心情を表す重要な小道具とされている。主人公千代が肌身につけてきた指輪を形見として恋人に贈る場面である。(12)。

今朝見舞いひしとき瘦せてゆるびし指輪ぬき取りて、これ形見とも見給はゞ、婿とて心細げに打ち笑みたるその心、今少し早く知らばかくまでには衰へさせじを」と我罪恐ろしく打ち守れが、「良さん、今朝の指輪はめて下さいましたか」と云ふ

声の細さよ。答へは胸にせまりて口にのぼらず、無言にさし出す左の手を引き寄せて、じっとばかり眺めしが、「妾と思って下さい」と云ひもあへず、ほろほろとこぼす涙そのまゝ枕に俯伏しぬ。

明治 30 年、尾崎紅葉の『金色夜叉』が読売新聞に連載される。ここには「いまでかつて見ざりし大きな金剛石を飾れる」と、黄金の指環をはめた人物が登場する。(13)。

「金剛石！」「うむ、金剛石だ。」「金剛石？」「成程金剛石！」「まあ、金剛石よ。」「那が金剛石？」「見給へ、金剛石。」「あら、まあ金剛石？」「可憐い（すばらしい）金剛石。」「可憐い（おそろしい）光るのね、金剛石。」「三百圓の金剛石。」瞬く間に三十餘人は相呼び相応じて紳士の富を謳へり。

初めてダイヤモンドを見た娘の胸は太鼓の如く轟き、料亭に居合わせた人々は、口ぐちに「金剛石」を連発する。初めて見るダイヤモンドに興奮する人々が描かれている。『金色夜叉』によって、ダイヤモンドの指輪への一般人への注目がいっそう高まることになる。

明治 38 年『時好』の内田魯庵『指輪』には、その題名からも当時の人々の指輪に対する関心の高さを感じさせる。

指環は此頃の女の命。どれほど立派な扮装をしたからって、指環が無ければ、何の、衣服は死んだもの。女的美貌が照り輝くは指環一つ。金の延べは田舎臭く、彫刻のあるのは野暮臭く、廉ッぽい宝石は品格悪し如何にしても金剛石、金剛石、金剛石！

お米は、「銀や金細工の指輪は野暮ったい、指輪はダイヤモンドでないと意味はない」とダイヤモンドに執着する。滑稽ではあるが、当時はお米のような女性が多くいたようである (14)。

第 3 節 海外からの影響により変化する指輪

明治政府の政策により、日本の工芸品は海外博覧会に出品され、装身具も輸入され基督教の風習をとり入れた結婚指輪は日本に定着し始める。

1. 海外の装身具

明治 12 年、神戸の外国商館は京都博覧会において、ダイヤモンド 45 個入りの金時計、指輪、耳飾りなどの輸入品を出品した。

そこでは、西洋式の大礼服、平常服の服制が定められた。天皇陛下大礼服用の金釦、皇后陛下のダイヤモンドの王冠や腕飾りなどの装身具がフランスから取り寄せられた。皇后の服装と装身具については、明治 26 年にベルギー公使のアルバートと共に来日した夫人のエリアノーラ・メアリ・ダヌマンの明治日記にあり、「殿下は明らかにパリから直接取り寄せられた衣裳をお召しになり、それは真紅の錦織のサテンで、胴着はうすいピンクであった。装飾品は大きなダイヤモンドのブローチと日本の星章をお着けになっていた。それには、最高のダイヤモンドが散りばめてあった」と誉める (15)。

明治 40 年、グリード・モナリーの描く『昭憲皇太后像』には、長手袋をつけ指輪こそ見えないが、大礼装姿の皇后は王冠、首飾り、腕輪などのパリュールに勲章を着けた姿で描かれる。大礼装では手袋着用のため指輪は描かれない (16) (図 8)。

新政府は、日本が欧米諸国に劣らぬ文明国であることを印象付けようとして、明治 16 年、東京・麹町に「鹿鳴館」を建立する。迎賓の集いが連日連夜、開催され、華族や政府高官夫人、令嬢などは当時ヨーロッパで流行したヒップを高く上げた「バスマル・ドレス」を着用した。男達の名誉と意地と国家の威信をかけて、慣れないコルセットでウエストを絞り、日本髪を洋風に束ねて、首飾り、耳飾り、腕飾りや指輪などの装身具で着飾り軽やかにステップを踏んだ。髪型も、上げ巻・下げ巻・マーガレットといった洋装に合う束髪が提唱され、比較的簡単に結える束髪は、和服にも似合うことから全国的に広まっていく。束髪になると同時に、それまでの髪飾りや簪などの装身具の着用は減少する。日本髪を廃する「婦人束髪会」を皮切りに、「制服」として洋風モードが徐々に広がる。

2. 指輪装着習慣の定着

ヨーロッパ社会で中世から続いた結婚指輪の習慣が日本に定着し始める。明治 39 年発刊の「日本家庭百科事典」に「本邦にても此の風ようやく行われ、あるいは結納後に与うるものあり」とある。約 300 年前の『ローマ典礼儀式書』によると[「結婚指輪は今後、左手にはめるべし」と定められる]とあり、その影響により、日本でも左手の薬指に結婚指輪を嵌める習慣は現在も残る。(第 1 章 第 1 節)

日本画には、結婚などの正装姿で指輪を嵌めている女性を描いた作品が多い。

山本松谷の明治 35 年頃の作品「佳秋図」には、白菊を眺める正装姿の 3 人が描かれている。黒紋付を着用した白髪の夫人と、正装をした母と娘がいる。花の髪飾りを挿した母は、右手の薬指には 3 つの丸い玉付指輪を嵌めている。海老茶の袴を胸高に締め、扇文様の長袂姿にお下髪の少女は、両手に母親と同じような玉付の指輪を嵌めている。秋の喜びの日の風情ある場面である。母親の指輪は天賞堂の広告にあるものと酷似しており、ダイヤモンドであることが推定される (図 9)。

鏑木清方の「嫁ぐ人」には、登場人物全員が正装姿に指輪を嵌めている。婚礼に好まれた高価な白鼈甲の髪飾りをつけている中央の女性は、右手薬指に輸入品らしきダイヤ

モンドをちりばめた菱形の指輪を、右手小指には真珠の指輪を嵌めている。首掛け時計鎖をしている右端の女性は、当時女学生に流行したマーガレットを結び、左手の薬指に嵌めたルビーの指輪からはすでに婚約していると推測される。左端の後姿の女性の帯には孔雀、着物の裾には飛翔する燕の群れが描かれ、アール・ヌーヴォーの影響が和装に取り入れられていることが窺える。画面に描かれる5人の女性すべてが指輪を着装している（図10）

新郎新婦の指輪の交換の定着によって、参列者達もこぞって指輪を嵌めたようである。また、指輪が左手薬指に嵌められていることが多い。橋本隆志のいうように、結婚指輪は日本の女性に大きな影響を与えた。

明治36年5月、高島屋発行の「新衣裳」には、婚約の証として指輪を男性が贈る豪州の風習を伝える記事「豪州土産」がある。

豪州には許嫁のしるしとして指輪を贈る事が通例の様です。貰ふた女は左手の第三指に指輪を嵌める。男が金持ちならば「ダイヤモンド」の指輪だそうで普通ならば生まれた月により定められた宝石を用ゆるさうです。略

指輪は「真実の保証」なりと何人（なにびと）も考えておりその訳は円満無窮、永久永存、永遠無終などの意を示し常盤の松の幾千代かけて変わらじ易はずとの意を明らかにしておりますからです（17）。

ここでは、指輪は夫婦の永遠の愛の誓いであると記される。

結婚指輪以外にも、日本に伝達された海外の指輪着装の習慣がある。誕生石である。大正元年、アメリカの業者によって誕生石が日本に入ってきた。翌年、三越百貨店が「12ヶ月の指輪」として発売する。「12ヶ月の指輪」は2つの方法が普及した。着用者の誕生月にあたる宝石を常時装着するものと、同一人が、その月に相当する宝石を月毎に順次取り替えて着用するものである。

また、大正3年には「花言葉指環」が発売されたことも付け加えておく。こうして、指輪装着場面は拡張していった。

第4節 指輪の種類の変化

指輪の種類の変化を広告や図像から見てみる。

1. 明治期の広告と指輪の種類の変化

明治23年9月に「国民之友」に天賞堂が初の絵入り広告を掲載した。指輪の絵には「黄金製指環」と素材明記がある。小さな石や彫金細工などでデザインされたもので、10年頃に流行した平打指輪は掲載されていない（図11）。「国民之友」に27年4月に天賞堂が掲載した広告の見出しには「寶玉入金製指環」とある。ダイヤモンド・サツイ

ヤ（サファイア）・ルビー（ルビー）・エメラルド・オパール（オパール）が掲載されていて「此の外金或はプラチナ地へ種々の彫刻を施し又は彫刻に加ふる寶石を装嵌したるもの夥多有」と書かれている。指輪は輸入の宝石入りのデザインに変わっていった（図12）。

白金（プラチナ）に関して日本初と思われる記事が『日本絵入り商人録』にある。そこには、洋行帰りの一紳士の装身具が挙げられ、「金皮時計に金と白金の2本鎖云々」とある。横浜コロンの広告には、金・銀・白金、鎖類、鍔物類が掲載されている（18）。

白金細工の指輪も愛用されるようになっていく。第2章第1節で述べる明治26年の村松萬三郎の白金溶解の功績により、国産の白金指輪は増える。30年代には、素材は白金や金を使用し、輸入品のデザインを真似た指輪や結婚指輪が普及し始める。明治30年の揚州周延「真美人 十四」には、和洋折衷の装いの女学生が金地金に丸型の石付の指環を嵌めており、西洋の装いの影響が現れている。（図3）。

2. 享受者の変化

明治維新以来、いち早く装身具を享受したのは、社会におけるほんの一握りの人々であった。つまり皇室を頂点とする貴族社会と一部の産業人、あるいは大地主階級の家庭の者たちである。そして、序々に中流社会にも浸透した。

その例を明治39年から42年に山本松谷（昇雲）の「今すがたシリーズ」から年齢や職業を問わず指輪が装着された姿を分析する（19）。

「いま姿シリーズ」67枚の内27枚には指輪の装着の場面が描かれ、女性たちは様々な指に指輪を嵌めて描かれる。娘や少女が指輪を嵌める図は「いま姿 絵まきもの」「いま姿 おてつだい」「いま姿 一枝」をみてる（第1章第節）。

娘は右手の薬指にデザイン指輪、左手の小指に真珠の指輪を嵌める。少女は、左手の小指に指輪や薬指に真珠の指輪を嵌める。女学生は右手薬指に石付の指輪を嵌める。明らかに既婚者とわかる人物でも、左右の指や小指に指輪を嵌めている。このように、1人で複数の指輪を装着している（図4）。

松谷は流行に敏感で、『風俗画報』の挿絵を担当していたことで有名である。このように、女学生や少女まで指輪を嵌める姿は松谷特有の感性である。女学生を対象にした『女学世界』の広告の影響を受けた者は多い。しかし、この場合は男性である。彼らは贈り物として指輪を購入し、妻や娘や孫達に嵌めさせたのであろう（20）。

「今すがたシリーズ」は、指輪愛好家の年齢を引き下げ、享受者の「差異化願望」を満足させたのである（第3章第1節後述）。

小説からも享受者の変化が見て取れる。明治42年『それから』では主人公・代助が、友人の結婚相手・三千代に贈る結婚祝いの指輪を書いた。指輪は「細い金枠の比較的おおきな真珠を盛った当世風の」指輪であった。代助は、裕福で文化的な層に属した夏目漱石自身がモデルと思われる人物であり、この作品は、時代の先端の指輪が流行を牽引

していく様が描かれる (21)。

第2章 指輪の普及の社会的要因

明治期に指輪が急速に日本人に受容され発展した要因は3つあると考える。第1は、高度な技術を持つ金工作家が、時代の変化に対応し、生き残り策として指輪製作に挑戦した力である。第2は、百貨店や専門店の台頭と宣伝力による。第3は、時代の変化を積極的に取り入れ、流行を受容した女の好奇心や美意識である。これらが重なって、指輪の装着が大きな潮流となったと考える。この章で検証していく。

第1節 金工作家の活躍

明治政府は、維新という近代化の名の下に様々な法律を公布し、制度的にも整備を行った。明治5年、太政官布告により、軍事以外に携わる公務員の礼服は「洋服」と定まる。この事は、間接的ながら工芸関係者、時に金工作家達に大きな影響を与える。

政府が初めて参加した明治6年開催のウイーン万国博覧会において、日本の工芸品は「評判一時ニ高クナリ見物人カ盛ニ日本部ニ押寄せ…」と日本の金工技術は高い評価を受けた。装身具は、時計鎖、煙管、カフス釦、ブローチ、腕輪、耳飾りなど、日本では装着する習慣のないものも出品され、すでにヨーロッパの市場を意識した製品づくりがなされていた (22)。

明治9年、3月28日に太政官から布告された廃刀令により、仕事を失った装剣金工職人達は、宗教用品や刀装具などに使われた見事な金工細工の技術を生かし、指輪や鎖など新時代のジュエリーを作り始め、国内外の博覧会に出品する。その過程は明治12年に発刊された『東京名工鑑』に見ることが出来る。そこでは、後藤派の金工・小出豊吉(喜光)の指輪製作が示される。「一東齊寿光に就いて10ケ年修行し明治4年に開業し、僅か2ケ月程腰元彫をなせしが直ちに廃刀の勢いとなれり。依って釦、指輪類の製造を始めた」とあり、廃刀令後、指輪の制作をした金工作家の記録である (23)。

明治14年、上野公園で開催された「第2回内国勸業博覧会」には、村松萬三郎の指輪が15点出品された。23年の「絵入り指輪広告」が『国民の友』に掲載される。中央に大きな石を嵌めたものや、小粒の石を並べたものなどにデザインは多様化する。明治26年には東京の村松萬三郎が、白金溶解に成功した。石井研堂の『明治事物起源』では、次のように書かれている。功績の偉大さが表現される (24)。

白金細工中、之を溶解することは不可能にて工人、皆之を遺憾としたりしが、明治26年中、東京の人、村松萬三郎終に其法を發明し、為に工作上大に利益せり

同年、瑪瑙や水晶が産出された甲府では、宝石の研磨加工技術修得を目的に中国に職人などを派遣し、帰国後は「清国伝習水晶細工所」を開設して、後進の指導を行う。

明治 26 年、御木本幸吉は、アコヤ貝を用いた半円真珠の養殖に世界で初めて成功した。明治 38 年には真円真珠の養殖を成功させ、この発明は欧米の市場に大きな影響を与え、養殖真珠は大正・昭和期になると日本の代表的な輸出産業へと成長した。

第 2 節 専門店や百貨店の台頭

東京を中心にして、明治 12 年から金銀細工を手掛ける店が相次いで開業し、工場も操業された (25)。明治 10 年代には、日刊新聞や月刊雑誌、絵入り新聞などが続々と生まれ、「さしえ」には風俗が描かれ、指輪のデザイン画も登場する。日本の指輪普及の黎明期である。

1. 媒体広告にみる専門店と指輪デザインの発展

「第 2 回内国勸業博覧会」外国館の様子は、『風俗画報』の挿絵に描かれる。天賞堂や服部時計店などの展示前を様々な装いをした、大人や子供達が行き交う (図 13)。

明治 23 年、天賞堂の「初の絵入り指輪広告」によると、18 点の指輪の内、平打ちの指輪は無く、地金に彫金細工をしたものが 2 点、残りの 16 点は石付指輪であり、その半数は小粒石で繊細な細工が施されている。特に上段の 3 点は、正面図と側面図が描かれ、手の掌側の地金は細く、小柄な日本女性好み細工であり、付け心地良さまでもが伝わる (図 11)。

明治 25 年、『風俗画報』に掲載した玉寶堂の広告は、「美術金製指環」「宮内省御用」の大見出しに 6 点の指輪が描かれる。上段の 3 点は小粒石付の繊細な細工で、下段 3 点は花鳥風月を彫金で描く (図 14)。27 年の天賞堂の広告には、「プラチナ (白金) 地に種々の彫刻を施し、其の上に宝石を装嵌したるもの多くあり。御来車の上、現品御一覽下さるか、郵便注文なれば (略)」と来店を促し、その上に郵便での通信販売を勧め、「商品の破損や瑕疵ある時は、原価にて買い戻す」とある。買い戻し保証付きの広告であることがわかる (図 12)。

同時に、指輪のデザインにも新しい変化が現れ、曲線を取り入れたデザインが増える。30 年、天賞堂の広告は、当時の日本画家、瀧和亭先生考案並書・野口小蘋先生考案並書各 4 点が描かれる。

瀧和亭の指輪は、幅の広い金属に、富士山・梅・水魚などの彫金細工が施され、女流画家の野口小蘋は「竹に雀」「牡丹に蝶」「葡萄」など、着物や帯に描かれるような図案を描き、日本の美意識が生きる作品である (図 15)。

明治 37 年、植田商店は、初の結婚指輪広告を『服装新聞』に掲載する。それには結婚指輪や婚約指輪と共に金銀杯・簪がイラストで描かれている。ダイヤモンドは、中心から放射線状に光を放ち輝く様が表現され、当時の人々の目を惹きつけたことがうかがわれる (図 16)。

明治 40 年、『時事新報』は美人コンテストを開催し、その賞品は、天賞堂製の 300 円相当の指輪であった。ところで、明治 30 年、読売新聞に連載された『金色夜叉』の

主人公は、「300円のダイヤモンドに目がうつり」と恋人宮がダイヤモンド欲しさに自分との恋を解消したとなじる場面は有名である。10年の歳月はあるが、美人コンテストの賞金が300円相当のダイヤモンドであったことについて、当時の人々は驚くとともに、指輪への憧れが増幅されたことであろう。

41年1月1日付『時事新報』新春号附録には、岡田三郎助の『指輪』が掲載され、左手にダイヤモンドの指環を光らせた和装の美女が描かれる。

前年の12月には、「新年大画附録」の大広告が繰り返し掲載され、その宣伝文には

「洋画家の巨擘岡田三郎助氏が本社の為に特に丹精を凝らしたる近来の傑作にて題して「ゆびわ」と云ふ 略 右手は頬杖、左手は机の上におきたり 譬へば瑪瑙の雨に濡れたるマーブルよりも軟かく温かなる左手の無名指に燐として輝けるは何者ぞあらたにサツクを出でよ 此の美人の物となりたる幸深き指環ならず」(26)。

とあり、「美人の無名指に嵌められる指輪は幸深きと」名文で書かれた『時事新報』新春号は、即日完売した。この指輪は、明治19年に発売されたアメリカ・ティファニー社の白金製ソリティア・ダイヤモンドと同デザインである(図17)。

3 百貨店

明治38年1月2日、全国の主要新聞に三越呉服店の1頁広告が掲載されたのが、デパート初の宣伝である。さらに各種PR誌が刊行され、当時の一流作家が寄稿し、文芸作品の懸賞募集も行われ、読者の購買欲を刺激した(27)。

明治42年「みつこしタイムス」には指輪の繊細なデザイン画が掲載された。9種のうちの、4点は18金製真珠指輪であった。その内の1点は、山本松谷の「いま姿」に描かれた指輪と酷似する。

天然宝石の他に合成宝石の指輪も発売されることで、指輪はファッションアイテムの一つとして上流社会以外の人々にも注目され、日本の装身具の歴史を牽引してきた。専門店の台頭により、婚約指輪や結婚指輪を始めとする製造技術の質は、この頃を境にして急速に高められた。

第3章 指輪の普及の心理的要因

第1章では、日本の指輪着用を画像や文書資料から調べる事により、明治10年代から40年代までの僅かな間に、指輪の素材や享受者の様々な変遷過程がわかった。当初の指輪図案には日本画家達が携わったが、海外の博覧会への出展を期に指輪は輸入されるようになり、外国製品の模倣から始まった指輪のデザインは、日本人の体型にあう繊細なデザインに変化していった。

第2章では、社会的状況により指輪が普及した要因を探った。日本の金工作家の優れ

た技術とそれを生かした製品を作りだした工房の活躍も見られた。また専門店や百貨店の台頭も目覚ましく、次々と商品を開発した。PR誌やポスター・広告などのメディアを活用して需要の創造を起こした事が明らかになった。

では、享受者は、指輪の流行をどのように受け止めたのであろうか。その点を第3章で明らかにする。

第1節 差異化願望と同一化願望

人々が、次々と指輪を享受した手がかりは、「宝石の要件」にあると考える。宝石は、天然資源であり、不変の耐久性を持ち、希少価値であり、資産性もある(28)。それは「比類なく美しく、永遠に輝き」、西欧では王公貴族の富の象徴であり、宗教儀式に使用された。指輪は次第に憧れの対象となり、宝石の輝きは多くの人々を魅了した。明治の人々宝石指輪に魅せられたのは、宝石の持つ美しい輝きにあった。

1. ファッションの心理

人々が、なぜ、装身具を次々と享受したかを考察する手段として、装身具の起源説を引用する。

装身具の起源には、光輝くものには特殊な力が宿るとする呪術説。人間は余裕があればいつでも身近なもので身を飾ったとされるホモルーデンス説。自分を人と違うように見せるために化粧や衣服を変えたりする動作の一環として、身の周りの物をつける自己異化説(差異化願望)、人と統一性の物を身につけようとする自己同一説(同一化願望)などがある(29)。

日本の縄文から古墳時代の指輪には、呪術や宗教的な意味合いがあった。それが次第に弱くなり、護符やシンボリックな意味合いも迷信として退けられるようになった。その後、千数百年の空白を経て明治期に復活してからは、ファッションとしての機能が高まり、装身具の最盛期が訪れたのである。

ファッションを考察すると、流行の衣服や装飾は、人と違う人生を送りたいという「差異化願望」と、他の人々と同じ生活を送りたいという「同一化願望」との緊張感から生まれることがわかる。

その様子は、明治22年刊『宝玉誌』にある(30)。

「指戒(指輪)、手釧(ブレスレット)、および約襟の花針(ブローチか)等を始めとして装飾に宝玉を用いること最も多く、現今、国人の上流にある者、男女を論ぜず必ず多少これを保蔵する」

東洋、西欧を問わず、上流社会は、最新のファッションに身を包み、自らの経済力や

社会的、文化的な優位性を誇示した。下流の階級がそれを真似るようになると、ファッションの希少性や優位性は失われ、上流社会は次の新しいファッションを作りださねばならない。上流社会は下の階級との差別化を図るために、特徴ある衣服や装身具を身につける。さらに、下の階級は上流と同一化したいという衝動から、そのスタイルを模倣する。

「指輪を買うと風邪をひく」という説話がある。新しい指輪を嵌めた人は、その指輪が他人の目に留まるように、手を口元に持って行き、咳をする。その動作は、「あなたが持っている指輪と同じようなものを私も持っている。よく見てよ。あなたの指輪とはデザインが違うでしょう」の心理であり、「差異化願望」と「同一化願望」とが交錯した行為である。指輪を嵌めた手で口元を覆い、咳をして、さり気無く他人の目を引き付けるのは、「流行を追う」自分を軽薄に見せない為でもある。

2. 女性にとっての「物」

樋口一葉は、『闇桜』において、主人公が常に嵌めていた指輪を「形見」として恋人に渡す場面を書いた。ここには、愛する人に形見の指輪を贈る行為により、自分との思い出を大切にしたいと願う女心が描かれた。

女性の本質は“誠実さという美德と結びつく”のか。ジンメルは次ぎのように言う。

古い持ち物にこだわる事を始めとして、自分の持ち物や愛する人たちの持ち物に愛着を持ち、さらには、手近であれ秘められた形であれ、いわゆる「思い出」に執着するのが女性の特徴である。「物」と「思い出」や「人」を統一的にとらえるのが、女性的な本質である (31)。

第2節 指輪装着者の心理

これまで見てきたように、当時の絵画や小説からは、指輪が流行する様子が見て取れる。女性達は流行へのこだわりが強いといわれているが、指輪をとおして「なぜ流行が女性達をとらえるのであろう」について考察する。

1. 流行が煽る虚栄心

経済力を持たない女性が指輪を身につけているとき、それは男性から贈り物であることが多かった。また、男性が女性に指輪をプレゼントする行為は、自身の権威と富の象徴、つまり虚栄心の現れといえる。

装身具の中では唯一の、肉眼で見える小さな指輪の装着は、女性にとって特別の意味を持つ。手を動かす毎に他人の視線は指輪に留まる。それは、人柄を個性的に飾り立てることであり、従って、絵画やポスターに、小さな指輪が一段と目立つように大きく描かれる所以はここにあるといえる。

虚栄心を煽る商品は次々と生み出され、専門店や百貨店の広告は、毎回、新製品のPRをして流行を牽引する。流行は矛盾した構造を持ち、どれだけの期間続くのかは予測できない。一番新しい、今存在しているのが流行であるが、同時にすぐに過ぎてしまうのも流行である。流行の頂点に立った時には、すでに凋落が始まり、そのはかなさ故に人々は次々と新しいものを楽しむ。特に指輪には、流行を象徴するような魅力があったのであろう。

第1章で述べた岡田三郎助の「ダイヤモンドの女」は、流行の仕掛人達により、全国紙に一斉に発売が予告された。そして、地方も都会との差なく、日本国中で同時に発売される。読者は最新の流行を一斉に目にして、『時事新報』新年号を手にしたのである。

2. 指輪の流行は、誰のものであったか

社会を構成する層は保守的な力関係で形成されている。上層は変わることを恐れ、下層はなかなか変わることが出来ない。それに対し、中流は、上層と下層との狭間において、お互いの「違い」を強調しなければならない。それも、もともと大した差はないのに、いや大した差がないからこそ、彼ら中流こそが、流行の担い手となる。

その例は山本松谷「今すがたシリーズ」が明らかにしてくれる。

(1) 日常的に楽しむ指輪：「いま姿 シリーズ」

「いま姿 おてつだい」は、母と娘と糸繰りの場面、「いま姿 えまきもの」は、娘が絵巻物（伊勢物語第九段）を見る場面である（図4）。

他に、「いま姿 一枝」には、八重桜の枝を両手で、今まさに折らんとする姿がある。

「いま姿 おどろき」には、女学生が雄の甲虫をみて驚く姿に指輪が描かれる。

「いま姿 おどり」の少女は双の髷を結び、額の髪は切り下げ、花かざりの髪飾りを付けている。装いは、流水模様を全体に描いた青地に海棠の葉と花を描いた着物である。高く結んだ帯は、鮮やかな赤地に黄と薄青色の模様が入る。薄いピンクの袂をたらす。右手、赤地に鶴が描かれた扇を、右そでの袂を持つ左手の小指に真珠が2粒入った指輪を嵌めている。舞台姿らしく愛らしい。

「いま姿 羽子あそび」の少女は結髪に額の髪は切り下げ、流行の薔薇の髪飾りと水仙の花をつけている。右手は武者絵の羽子板を持ち上げる。羽根つく瞬間に袂押さえた左手の薬指に、真珠が2粒入った指輪が見える。

「いま姿 おあいにくさま」には、かるた遊びに興じる娘と婦人をはじめ、日本の年中行事の場面や女性の日常の生活場面が描かれている。ここで、注目したいのは、彼女らの指には指輪がつけられていることである。婦人は左手の薬指以外にも指輪をつけているようすが見える。小指の場合もある。右手に嵌めているものもある。指輪が年齢を問わず、また、つける指も自由で、日常的に愛用されたことを示している。描かれる女性は生き生きとして楽しそうである。

女性は流行の指輪を身につける事で、自分が何か特別で新しいものを手にしているという気になるのであろう。しかし、自己満足的な効果だけではない。まわりの人に影響を与えるのである。流行をまとった人は、眺望と賛美の眼差しを集める。眺望や妬みは、手に入らないものに対して固執する感情である。

(2) 人間関係を表す指輪

風俗を克明に描いた鏗木清方も、指輪装着場面を多く描く。明治36年「秋宵」では、流行のヴァイオリンを弾く女学生の左手の薬指に珠付きの指輪が描かれる。

前年の「孤児院」は、孤児院を訪れた良家の令嬢（女学生）が、子供達の一人一人に菓子包みを与えている。傍に院長と思われる老婆が控え、つつましく子供達を見守っている。

女学生の左手の薬指に幅広の指輪が、右手の薬指には真珠の指輪が描かれる。後ろに控えている下女の床についた手は、金の平打ちの指輪を嵌めている。平打の下女の指輪は、雇い主からの贈り物か、もしくは女学生からのお下がりである可能性もある。

下女にとっては、流行に遅れた物であったとしても、貴重な物であったであろう。指輪の装着からそれぞれの立場、感情まで読み取れる作品である（図18）。

第4章 仕掛けられていく流行

流行はテンポが早く素早く変わってしまう。上流が新しい流行を作りだしたかと思うと、もう下流が追いついてくる。そのテンポがますます速まると、上流は質を追求する間もなく、見かけの新しさを求め、コストの低い物で済ませるようになる。主流に乗るには、民主化し大衆化せざるを得ない。そこで振興の勢力が伸びる。

その様子を如実に表現するのは、広告であろう。広告には、同材質・同デザイン・均一価格の指輪が現れる。

第1節 マス・メディア広告による普及推進

マス・メディアとして雑誌が次々と誕生したのは、明治27年の日清戦争の後である。そして、雑誌広告の価値は急速に高まっていった。一定の読者層を想定して編集・発行されるものであり、されにセグメントされ、特殊なクラス・メディアとしての性格が際立つようになる。家庭用品や化粧品、医薬品など、読者に応じてメディアを選び、広告を出稿する事が一般化していった。指輪の広告も様々なメディアに登場した。

明治40年頃からは、絵入り、金額入りの大衆化指輪の広告が『演芸画報』に掲載される。

明治41年2月の關口洋品店の広告の見出しは、「最新流行舶来品指環」というものであった。「此広告を見て御申込の方は必ず婦人世界愛読者なる旨御申出を乞ふ」と上段見出しにある。これが、指輪のタイアップ広告の最初である。その広告には、「銀台

金着新ダイヤ入り」とあり、銀台に金メッキを施した偽物のダイヤモンドの指輪が登場した事が解る（図 19）。

明治 44 年 5 月の「金田時計店」広告に掲載された 18 金製指輪の 12 種類は、特価均一価格式圓である。「金メッキは厚く、容易に離脱変色の憂無く、且つ優尚なる寶石を装入しあり」と宣伝され、素材は金メッキであり、新ダイヤモンド（偽物のダイヤモンド）やルビーの指輪などのイラスト画が描かれる。最新米国婦人持「18 金着寶石入指輪・各種共壺個箱付・特價金貳圓」宮内庁御用達とある（図 20）。

第 2 節 質と価格の多様化

明治 45 年 1 月「いせ竹小間物店」の広告には、8 点の紋形指輪の絵入り指輪、花菱や橘紋などの製品であり、素材により価格の違いが表示される。18 金製の価格は金 3 圓、9 金製は金 1 圓 80 銭、純金製、金 35 銭と幅広い価格帯で、誰でもが買いやすい金額であることが特徴である（図 21）。

同じ頃の『婦人世界』の広告「大西白牡丹」になると、宝石や素材の金属の質は高まっており、デザインも現在に通じる製品である（図 22）。宣伝文には「何時も変わりなき価値を保つものは無疵にて光良き金剛石なるべし、大西白牡丹にては永久の信用を重んじ選良の寶石を貯へて御高命を待てり」とある。14 点のデザイン画が描かれ「金剛石 1 個入・白金製 400 圓」の高級品から、「29 銭の金剛石入金製透彫刻」の一般品まである。

「いせ竹小間物店」は大衆を対象にして、イミテーション指輪を均一価格で販売した。「大西白牡丹」では、天然宝石の高級品を取り扱い、専門店は顧客拡大を意識した製造・販売・広告をするようになる。幅広い価格の指輪が、中流や下流におよんだことが解る。

大正 3 年の東京都内の美術・時計・貴金属取扱店は 55 店舗になった（32）。

当時の専門店の繁盛ぶりを表す小説がある。

永井荷風の「見果てぬ夢」には、銀座通りを歩く人びとの風俗流行の変化を観察して書かれている。

「近頃になって著しく目につくあの柔らかい緑の色の翡翠の珠と青貝の細工」が今後は、見られない物として書かれ、「大勢佇立んでいるとその人込の中から目立つ若い女を見ようがために更に立止まる人もあるらしい。」と宝石店の繁盛ぶりを書く（33）。

『夢の女』では、元藩士だった父が零落し、詐欺事件の連累として警察に拘引されたりする不運にみまわれた主人公お浪が女中奉公から商人の妾、娼婦、接待の女将へと変貌を遂げる物語である。

「お浪は東京の妾宅から持って来た美しい衣服と、指に嵌めたふたつの指環、金の懐中時計など、凡ての所持品を売り払って、辛くも正月を迎えさせた。」指環や金の懐中時計を古物商に販売した様子が書かれる（34）。

明治後期には、指輪の享受者が中流から下流にまで及んだことがわかる。

おわりに

第1章では、日本の指輪着用を画像や文書資料から調べる事により、明治10年代から40年代までの僅かな間に、指輪の素材や享受者の様々な変遷過程がわかった。

宝石が産出しない日本では、従来装身具には、宝石は使われず、直接身につける装身具は存在しなかったが、海外からの影響を受け、輸入品の素材も増え、海外の風習を取り入れ指輪装着習慣が出来あがった。指輪のデザインも、海外の博覧会出展により、外国のデザインの模倣から、日本人の体型にあう繊細なものに変化していった。

第2章では、社会的状況により指輪が普及した要因を探った。日本の金工作家の優れた技術とそれを生かし次々と製品を作りだした工房の活躍も見られた。また専門店や百貨店の台頭も目覚ましく、次々と商品を開発し、PR誌やポスター・広告などのメディアを生かし、需要の創造を起こした事が明らかになった。

第3章では、見たこともない宝石指輪を、様々な広告媒体により頻繁に紹介・宣伝された一般人は、多くの情報を知ることとなる。西洋への憧れと流行に遅れまいとする一般人の心情は煽られ、宝石指輪は羨望の対象となり、所有欲に駆られた享受者の心理が明らかになった。

上流階級の洋装化からスタートした日本の装身具の中で、指輪は最も小さくて扱いやすく、和服にも着用できる。この理由で、明治期の人々は指輪を受容し、瞬く間に普及した。日本人は、指輪によって装身具を直接身につける喜びを知ったのである。

販売業者は販売チャンネルを増やし、次々と着用習慣を作り出し、美しい宝石に魅せられた享受者は増え続け、日本は世界第2位の宝石消費国となる。

本研究により、日本の指輪が急速に需要された要因は、明治政府の施策のもとに、金工作家の活躍と、専門店や百貨店の台頭によるもの、ということが明らかになった。そして、美しく珍しい物を享受したい女達の好奇心・物欲があったことは、忘れてはならない大きな要因と考察される。

謝辞

本稿を書くにあたり様々な人たちにお世話になった。百貨店の三越・高島屋や専門店の天賞堂の広報の方々には、貴重な資料の提供をいただいた。町田市立国際版画美術館の担当者からは貴重な版画の熟覧の機会を頂き、撮影許可をいただいた。

日本宝飾クラフト学院の露木理事長には多大な激励と資料使用許可をいただいた。

ここに、ご協力をいただいた皆様に御礼を申し上げます。